

琉球・沖縄 年中行事 Q&A

「百日」の意味について



●Answer
 帰依 龍照(きえりゅうしょう)
 沖縄市・コザ山球陽寺住職

Q 「百力日法要」と「百日祝い」について質問です。亡くなってからの百日、生まれてからの百日、どちらも節目の行事がありますが、何か関連があるのでしょいか？

「百日」の意味を教えてください。また、神道には「五十日祭」があり、沖縄では四十九日の翌日に「マブイワカシ」があります。こちらも、何か関連があるのでしょいか？

(沖縄市 Nさん)

百に込められた意味

A Nさん、素晴らしい着眼点です。百とは数の単位として、「ひやく」「もも」と読みますが、「八百屋(やおや)」「八百万の神(やおほ)」「よろずのかみ」などのように、「お」「ほ」と読み、ものごとのもとも多い様子を表すこともあります。

生まれてからの「百日祝い」の百は、赤ちゃんの乳歯が生え始める時期(個人差はありますが)である百日前後を意味し、「百日祝い」には、ミルク以外の食べ物を用意する、「御食い始め(おくいはじめ)」、別名「御百日祝い(おひやくにちいわい)」という儀式を行い、

赤ちゃんの健やかな成長を願います。

亡くなってからの「百力日法要(ひやくかにちほうう)」の百は、遺族の悲しみがわずかながらでも癒やされる百日前後を意味し、「百力日法要」には、仏式の場合、お仏壇にお供え物を準備する、卒哭忌(そごこくき)悲しみに哭(な)き暮れることを卒(しゆ)する意味)、別名「百力日」という儀式を行い、故人の成仏を敬います。

「百日祝い」「百力日法要」双方の「百」には、喜び/悲しみという正反対の意味があります。直接の関連はありませんが、生死(しじゆうじ)の大切な節目の行事であるという点は、今の時代にあっても、クワンマゲ

ワ(子孫)に伝えていきたい伝統であると思います。

忌日の忌明け

また、神道の「五十日祭」「十日祭」「二十日祭」「三十日祭」「四十日祭」と、十日ごとに営まれる神道の忌日(きじつ)故人を敬う日(きあけ)故人を敬う最終日(に)当たります。

「二十七日(ふたなのか・タナシカ)」「三七日(みなのか・ミナシカ)」「四七日(よなのか・ユナシカ)」「五七日(ごなのか・ゴナシカ)」「六七日(むなのか・ムナシカ)」と、七日ごと

に営まれる仏式の忌日の忌明けに当たります。

忌明けという点では、神道の「五十日祭」と、仏式の「沖繩の民間儀礼の「四十九日」とは、関連があるといえます。なお、「四十九日」の翌日に、沖繩の一部の地域や家庭で行われる「マブイワカシ(魂別れ)」「ハカヌトウドウミ(墓の戸止め)」「ヤシチヌウグワン(屋敷の御願)」などの民間儀礼は、一般的に「五十日(グジュニチ)」と呼ばれることがあります。これは、「四十九」の翌日が「五十日」に当たることからの命名であり、神道の「五十日祭」とは、直接の関連はないといわれています。

しかしながら、ある意味、これら「四十九日」の翌日である「五十日」をもって、沖繩の民間儀礼の忌明けと考える地域や家庭もあると耳にします。忌明けという点で、神道の「五十日祭」とは、偶然にも不思議な関連があるかも知れませんね。

Nさん、最初に述べましたが、学術の研究や向学の志の第一歩は、この「百」や「五十」の関連についての着眼点です。とても素晴らしい発想をお持ちであると、心から頭が下がります。

健やかな成長を祈って、百日祝いをしましょうね～



イラスト: 帰依ひろ子